

2021年5月

## 今月の新着図書から

カミュ『ペスト』三野博司訳（岩波文庫、2021年）

高等科図書主任  
林 知宏

アルベール・カミュ（1913-1960）のあまりにも有名な作品『ペスト』の新訳が刊行された。昨年から世界を震撼させているパンデミックの状況下で、あらためて人々の注目を集めている著作である。なんでも70年ぶりの新たな翻訳だとのこと。確かに新潮文庫の宮崎嶺雄訳は、文庫版の最初の刊行が1969（昭和44）年。私も高校生の頃から何かの折に読んできた。しばらくして再び読もうとすると、あるはずの本が見つからず、少なくとも二度は買い直してきた。最近活字が大きくなって改版されたので、それも重宝していた。昨年の第1回目の緊急事態宣言中、書店ではワゴンに平積みになっていて、「お一人様一冊のみでお願いします」などと品薄だったマスクと同じ扱いがなされていた。

ストーリー自体は、いまさら紹介するに及ばないだろう。アルジェリア第2の都市オランに突如伝染病ペストが発生する。それに端を発した物語である。主人公の医師ベルナル・リユーや他の人々の極限状況における振る舞いと心理的葛藤、さらに社会体制（いつの時代にも後手後手の対応になってしまうことが多い）が描かれる。

この新版にはいくつかのセールスポイントがある。第一に私が挙げたいのが、主人公の姓（Rieux）の表記である。新潮文庫版では、「リウー」となっていた。今回は「リユー」である。最も多く登場する人物名である。私にはカタカナ表記としてより自然に感じられた。2番目には、豊富な注（全体で135個）、解説（56頁に及ぶ）である。地図や写真も添えられていて、視覚的にも情報が補強される。小説の展開自体に緊迫感があり、自然に引き込まれるので、初読のときはかえって注釈は邪魔かもしれない。だが、再読、再々読においては、細部に興味に移ることもある。例えば、最初にリユーがネズミの死骸を発見する場面（16頁）の注（11）では、カミュがプルーストの父でパリ大学教授（公衆衛生学）アドリアン・プルーストの著作から想を得ていたとの指摘がある。これは底本のプレイヤード版にも記載があるが、こうした情報は結構有益だと思う。

現在も新型コロナウイルス感染症の拡大が続く中、『ペスト』には、多くの印象に残るシーンがある。致死率の高い病気に立ち向かう医師に対して、他者が「治療は一時的な勝利にすぎないのでは」と指摘する。リユーはそれに対して「つねにそうです。わかっています。けれども、それは闘いをやめる理由にはなりません」と返答する（188頁）。これはハリウッド映画風のヒロイズムとは異なる。いまの世界中の医療従事者たちの苦闘に想いを寄せるならば、現実感を伴って心に残る言葉である。43歳でノーベル文学賞を受賞した（史上2番目の若さだったという）カミュの代表作をあらためて手にする良い機会となるだろう。